

## 個別支援の基本

～地域で暮らす「一人」を大切に、  
「一人」が大切にされる地域づくりを目指すソーシャルワークの理解～

同志社大学 社会学部

社会福祉学科 空閑 浩人（くがひろと）

### はじめに

#### (1) 「諸君ヨ、人一人ハ大切ナリ」（同志社大学創立者・新島襄（1843-1890）の言葉）

\* ソーシャルワークや個別支援とは、目の前の「一人」を大切に作る営みであり、その地域で暮らす「一人」が大切にされるための営み

#### (2) 私たち相談支援員一人ひとりが、当事者や家族、地域の大切な「資源」となる

資源のなかでもっとも重要なものは、いうまでもなく、人間自身の創意、想像力と知力である。

(E.F.シューマッハー/酒井懋訳(2000)『スモールイズビューティフル再論』講談社学術文庫、96 頁)

#### (3) 人が一つの職業に出合うことには意味がある！？～私（空閑）と社会福祉との出会い～

\* サラリーマン（一般企業（音楽関係機器の契約・販売）での営業職）生活で経験した、会社の「売上げアップ・シェアの拡大」や自らの「営業成績」、他の社員との「競争」が「常に」頭の中にあるコミュニケーションのつらさ

\* 「さすがにそこは（それだけは）、僕には超えられない・・・！？？」

\* 退職→ニート生活→フリーター生活→友人の家族からの紹介で重症心身障害者（知的、身体的に重度の障害をもち、かつ医療的ケアが必要な人々）の介護施設に就職

\* 介護や個別支援の仕事は、目の前の人（〇〇さん、〇〇くん、〇〇ちゃんという唯一無二の存在である人）のことを（この人が何に困って、どんな生きづらさを抱えていて、だからどんなサポートが必要で、そのために自分に（自分たちに）何が出来るのかを・・・会社の売上げや利益のため、自分の業績のため、上司に怒られないため、同僚との競争に勝つため、とかではなく）、「本気に」「ピュアに」「まっすぐに」考えることができる仕事

\* ここ（社会福祉・ソーシャルワークの仕事、介護や個別支援の仕事）には、「競争」ではなく「共創」「協創」「共奏」「協奏」がある・・・「僕はこの世界にいたい」と思った出会いと経験

### 1. 一人ひとりに「生活」がある（あった）ということ大切に

\* 人の数だけ生活や生き方がある・・・個別支援とは「個別の生活世界」へ接近する作業

【知っていますか、覚えていますか？】

1985年8月12日（月）18時56分、2005年4月25日（月）9時18分に起こった出来事は？

\* 一人ひとりに生活があり、家族があり、昨日の思い出があり、今日や明日の予定があり、行く場所や会う人がいたということ

\* そこに「それぞれの生活、それぞれの暮らし、それぞれの日々、それぞれの日常、それぞれの人生」があったということ・・・このことを忘れてはいけない

\* 様々な人々とその生活にかかわる個別支援に大切なことは、一人の人とその生活の個別性や独自性を、徹底して尊重する「意識」や「感性」を失わないこと

## 2. 人が「生きて、生活する」とは何か？人の「幸せ」とは何か？

### (1) 人が「生きる」とは何か？～ソーシャルワークや個別支援活動の根底にある考え方～

\*重症心身障害者施設の職員としての経験から、私（空閑）のなかにもあり続ける「問い」

\*男女の高校生の物語『君の臍臓をたべたい』（「キミスイ」！？）から

『君の臍臓をたべたい』は、小説家住野よるによる男女の高校生を主人公とする青春ストーリー。2015年に住野よる初の単行本として公刊された。男子高校生（「僕」）が病院で、「共病文庫」というタイトルの日記を偶然拾う。それはクラスメイトである女子高校生（山内桜良）の秘密の日記帳であり、彼女が臍臓の病気により、余命がもう長くはないことが記されていた。それから「僕」は、山内桜良の「死ぬ前にやりたいこと」に付き合わされることになる。まったく正反対の性格の二人が、次第に心を通わせていきながら、お互いを思い、成長していく物語が描かれている。

「きっと誰かと心を通わせること。そのものを指して、生きるって呼ぶんだよ」（中略）

「誰かを認める、誰かを好きになる、誰かを嫌いになる、誰かと一緒にいて楽しい、誰かと一緒にいたら鬱陶しい、誰かと手を繋ぐ、誰かとハグをする、誰かとすれ違う、それが、生きる。自分たった一人じゃ、自分がいるって分からない。誰かを好きなのに誰かを嫌いな私、誰かと一緒にいて楽しいのに誰かと一緒にいて鬱陶しいと思う私、そういう人と私の関係が、他の人じゃない、私が生きてるってことだと思う。私の心があるのは、皆がいるから、私の体があるのは、皆が触ってくれるから。そうして形成された私は、今、生きてる。まだ、ここに生きてる。だから人が生きてることには意味があるんだよ」（住野よる（2015）『君の臍臓をたべたい』双葉社、192-193頁）

\*「生きる」とは誰かとつながること、「誰かにとっての私」である続けること

\*個別支援の実践は、誰かやどこかとの関係を通してその人の「生きる」を支える営み

### (2) 人の「幸せ」とは何か？（住野よる第2作！より）

「幸せとは何か」私が正面の空に体を吸い込まれてしまいそうだなと思っていたら、南さんが突然言いました。（中略）南さんは、もったいぶったように私の目をじっと、前髪の奥の目で見て、それからやっぱり大事なことは私の方は見ず、ただ前の空を見ながら、ぼつりと床におくように言いました。「自分がここにいていいって、認めてもらえることだ」

（住野よる（2016）『また、同じ夢を見ていた』双葉社、84-85頁）

\*ソーシャルワークや個別支援の実践は、その人が「自分はここにいていい」と思える関係や場所（その人にとっての「居場所」）をつくること

### (3) 人が生きるために必要な「居場所」といえる関係や場所

\*薬物依存症とは「孤立の病」である

つまり、人が薬物に手を出すのもまた、多くの場合、「つながり」を得るためなのです。（中略）思うに、薬物社会が本人にもたらす最初の報酬とは、快感のような薬理学的効果ではなく、関係性という社会的効果です。そして忘れてはならないのは、違法な薬物を使ってでも人とつながりたいと願う人は、それほどまでに強く、「自分にはどこにも居場所がない」「誰からも必要とされていない」という痛みを伴う感覚に苛まれ、あるいは、人との「つながり」から孤立している可能性がある、ということです。

（18-19頁）私はかねてより、薬物依存症とは「孤立の病」であると考えてきました。つまり、孤立している人が「つながり」を求めた結果、かえって孤立を深めてしまうという、実に皮肉な病気です。（20頁）  
（松本俊彦（2018）『薬物依存症』ちくま新書、下線は引用者）

\*薬物を使わなくても、「ひとりじゃないと思える、自分が大切にされる、必要とされる、自分が充たされる、人とのつながりや関係や場所」の経験があること

### 3. 個別支援における利用者（当事者・相談者）とのコミュニケーション

#### (1) 「誰かがちゃんと見てくれている」という安心感のなかで人は育つ・支えられる

「ママがスマホばかりみてるから、ぼくはスマホになりたい。（中略）ママがみてくれないと、ぼくはなくてもいいようなきもちになっちゃうよ。だいすきなママがキライになりそうなぼくがキライなんだ。だからママのスマホになりたいです」（のぶみ（2016）『ママのスマホになりたい』WAVE 出版）

- \*誰かが自分を見てくれている、見守ってくれている、その関係そのものが支えになる
- \*自分や相手を「傷つけたり、試さなくてもいい」関係を経験すること

自殺や自傷を繰り返したり、非行や薬物から抜けられなかった人が、その泥沼から脱することができたとき、しばしば口にするのは、見捨てることなく、変わらずに見守っていてくれたことへの感謝の言葉である。（中略）それをしっかりと確かめることができさえすれば、大きな安心感が次第に蘇り、もう自分や相手を傷つけたり、試す必要もなくなっていく。（241 頁）

（岡田尊司（2016）『生きるための哲学』河出書房新社、241 頁）

#### (2) 自尊感情、自己肯定感は他者のメッセージによって育まれる

「私は私である」という自己同一性を支えているこの自己肯定の力はどこからやってくるのだろうか。それもまた、誰の目にも耳にもふれない透明な「私」自身がつくりだすのだろうか。そうではないと言いたい。その力は、「あなたがあなたであることはよいことだ」という他者のメッセージからやってくる。しかも、その「よい」には理由はない。ただ「あなた」がいるということがそれだけでよいことなのである。（藤谷秀（2001）『あなたが「いる」ことの重み』青木書店、12 頁）

- \*私の存在が「無条件に肯定」される「社会的」つながりや場所があるということ

#### (3) その人にかけられる「言葉」も、その人を取り巻く大切な「環境」である

##### 【「ありのままの自分」に価値があると子どもたちが気づける「関係」や「言葉」を提供したい】

彼らはみな、加害者になる前に、被害者であったような子たちなんです。極度の貧困のなか、親に育児放棄や虐待をされてきた子。発達障害を抱えているために、学校でひどいじめを受けてきた子。きびすぎる親から、拷問のようなしつけをされてきた子。親の過度の期待を一身に受けて、がんばりすぎて心が壊れてしまった子。心に深い傷を持たない子は、一人もいません。その傷を癒やせなかった子たちが、事件を起こして、ここに来ているんです。（「はじめに」より）

気の強い乱暴者だけが、犯罪者になるわけではありません。むしろ、気の弱い、自分を出すことのできない、おとなしい子の方が、少年刑務所にはずっと多いのです。そんな子は、「自己肯定感」が低いのが常。（中略）大切なのは「ありのままの自分に価値があるんだ」と気づくことです。（27 頁）

（寮美千子編（2016）『世界はもっと美しくなる 奈良少年刑務所詩集』ロクリン社）

.....

言葉 「いいんだよ」「がんばったね」「よくやった」  
この言葉が ほしい この言葉が ボクを幸せにする  
「お前はアカン」「でき悪い」「お前はいらぬ」  
この言葉は いらぬ この言葉は ボクを不幸にする  
嫌な言葉を言われると 自信をなくし 自分自身が嫌になる  
好きな言葉を言われたくて 行動し ボクは ボクを見失う  
一つ一つの言葉がボクを造る 一つ一つの言葉が ボクを壊す （46-47 頁）

- \* 支援者は、その人（当事者や家族）にどのような「言葉」をかけることが大切なのか
- \* どのような「言葉」で、その人に伝える、見守る、支えることが大切なのか
- \* あらためて、様々なコミュニケーション場面における「言葉」の大切さを考えたい

#### 4. 「支援する」とは何か？「支援者」は何をするのか？

##### (1) 「伴走者」としての支援者（なぜ「伴走」なのか？）

- \* その人の生活はその人のもの、その人の生活や人生の主人公はその人である
- \* 「誰かの人生や生活を代わりに生きることにはできない」という絶対的な事実の前に、私たち支援者は「謙虚」でありたい（本人から学ぶ、教えてもらうことの大切さ）
- \* 「支援」という名のもとに、支援者がその人の生活や人生を奪うことになってはいけない。支援することは、その人やその人の生活を管理することではない

##### 【伴走者としての支援】

私は支援者の役割をイメージするとき、長距離ランナーの伴走者を思い浮かべます。伴走者である支援者は、相談者であるランナーの斜め後ろあたりで、時折声をかけ、励まし、サポートすることを伴走の基本スタイルとします。時には、ランナーの隣で同じ速度で走るときもあれば、少し前に出てランナーを先導しながら走るときもあります。ランナーの状況に応じて伴走スタイルは変わります。

(173 頁)

##### 【相談者自身が幸せになりたいと思える支援を】

相談者の方がいて、支援する私たちがいる。支援は一方的に提供されるものでも、提供するものもなく、双方の共鳴や共感や協力体制があり成り立っていくものだと、相談者の方と協働して問題にむきあうなかで気付かせてもらったことでもあります。（中略）“力になりたいという想い、自体はとも大切ですが、忘れてならないのは、問題を解決する主体者は相談者自身であるということです。

相談者の方の「問題に向き合う気持ちと、本来持っておられる問題解決する力」を引き出し、盛り立てていくことが私たちの役割でもあります。言うまでもなく、私たちは相談者の方々の人生を代わりに生きることにはできません。「相談者を幸せにしてあげる支援」ではなく、「相談者自身が幸せになりたいと思える支援」が、私たちに求められているのではないのでしょうか。（176 頁）

（高橋亜美ほか（2015）『子どもの未来をあきらめない—施設で育った子どもの支援—』明石書店、下線は引用者）

##### (2) 個別支援におけるソーシャルワークの視点（個人と環境への視点）の大切さ

- \* 人は自分を取り巻く環境（人や場所）と「対話」しながら暮らしている
- \* 人の「こころ」は勝手に病まない！？（その背景には社会的な出来事や経験がある）

ひとは、ひととひととの関係の中で生きる。ひとと対話をしながら生きる。どれだけ孤立していたとしても、どれだけ孤独と思ったとしても、常に何かとの関係の中に生きる。何かに影響をされ何かに影響している。よって、ひとが精神を病むときはいつも、それはひととひとの関係性の中で起こるという考え方がある。（中略）ひとがとりまく環境とうまく対話ができなくなったときに、ひとは病む。（森川すいめい（2016）『その島のひとたちは、ひとの話をきかない—精神科医、「自殺希少地域」を行く—』青土社、180 頁、下線は引用者）

- \* 課題や困難状況を「人と環境との適合の不具合」「環境との対話が上手くいっていない状態」と捉える→「犯人さがし」「悪者さがし」には意味がない？
- \* 「なにがそうさせているのか？」「そうせざるを得ない状況は何か？」「そのような

行動に至る背景には何があるのか？」 「(いま、ここで) (その相互関係のなかで) 何が起きているのか？」をみること

- \*そして、「その人を支える」とともに、その人が生きやすい「環境づくり」「環境改善」「関係づくり」「関係性の再構築」「地域づくり」をする
- \*「人を変える」ことは難しい。でもその人への「かかわり方(支援の仕方、声のかけ方・・・)」やその人がいる「環境(家族関係、家庭環境、住まい、地域、学校、支援者やサービスとの関係・・・)」のあり方は変える、工夫することができる？
- \*人を「変える」のではなく、人が「変わる」「変われる」ことを支援する

### (3) そのために、支援者の側からだけでなく、「当事者の側から」「本人の側から」「家族の側から」の視点でみること(「本人や家族がいるところ」発の支援の過程)

- \*支援者の側からみたときとは異なる見え方がある。言わばもう一つの「当事者の物語」「本人の物語」「家族の物語」が紡がれる(人は皆、「独自の現実」を体験している)
- \*たとえば「わがまま(?)」や「無理難題(?)」とされるような当事者の訴えや要求(デマンド)であっても、まずはそれらを受け止めて、その背景にある「ニーズ」を「かかわりや関係性」の視点から社会的に捉える(ソーシャル・ニーズ!) こと
- \*見ようとしなければ見えない姿が、聞こうとしなければ聞こえない声がある

## 5. 個別支援と地域支援との連動(「地域共生社会」の構築とは何か?)

- \*当事者やその家族から発せられる訴えや経験は、私たちが暮らす地域や社会がもつ課題を「代弁」している
- \*個人的なことは「社会的・地域的」なこと、個人の生活課題は地域の生活課題である
- \*「個人が抱える生活問題の背景には、それを生じさせる社会的・地域的・環境的な構造が必ずある」という認識(困難事例は困難な人のことではなく、その時期や状況、あるいは取り巻く環境に存在する困難性のこと)
- \*「ひとり一人の住民の暮らしを地域で支える」という実践と、「ひとり一人の住民の暮らしが支えられる地域をつくる」という実践が、連動して展開されるソーシャルワーク(地域を基盤としたソーシャルワーク)が求められる
- \*「地域共生社会(ともに生きる地域社会)」とは何か？

漫画「ONEPIECE(ワンピース)」をご存じでしょうか。1997年から『週刊少年ジャンプ』(集英社)に連載されている尾田栄一郎さんの作品です。海賊となった主人公の少年モンキー・D・ルフィが、「ワンピース(ひとつなぎの大秘宝)」をめざして仲間とともに旅をする冒険物語です。

仲間を集めて本格的に航海に乗り出した主人公モンキー・D・ルフィが、第90話「何ができる」のなかで以下の言葉を叫びます。

何もできねえから、助けてもらうんだ!!! おれは剣術を使えねえんだ コノヤロー!!!  
航海術も持ってねえし!!! 料理も作れねえし!!! ウソもつけねえ!!!  
おれは助けてもらわねえと 生きていけねえ自信がある!!!

(尾田栄一郎(1999)『ONEPIECE 第10巻』集英社)

今日、「共生社会」すなわち「共に生きる社会」の実現をとということがいわれています。(中略)しかし、そもそも共生とは何でしょうか。共に生きる社会とはどのような社会なのでしょうか。その答えが、ルフィの言葉にあると思うのです。

それは、堂々と「助けて」といえる相手や場所、助けてもらえる関係、お互いに助け合える関係がある、そんなつながりが共有された社会のあり方をいうのだと思います。さまざまな制度を必要とする人が権利として利用できる社会のあり方だと思います。

ルフィのように自分ができないことを認め、誰かや何かに助けてもらうことへの申し訳なさや後ろめたさ、ためらいや気後れを感じなくてもよい社会のあり方だと思います。安心して助けてもらえる、いわば迷惑をかけあえる関係があってはじめて、私たちは生きて生活していけるという認識が共有された社会のことだと思います。(空閑浩人 (2016)『ソーシャルワーク論(シリーズ福祉を知る2)』ミネルヴァ書房、「あとがき」より)

## おわりに

### (1) その人が「もがく」姿を、「大丈夫、ちゃんと見ているよ・・・」という支援者でありたい

すべての人が皆自分だけの世界を持ち、その世界の中で必死に生きている。役割を持ち、何かしらの責任を負い、自分というたった一つの命を今日から明日へと日々運んでいく。(中略)そしてすべての人が、そんな自分だけの「世界」をもがきながら生きている。その姿を近くで誰かに見てもらえる心強さや安心感を知っている。「見てくれている」「私のこの小さな世界を知ってくれている」「大丈夫?と気にかけてくれる人がいる」ということがどれほど大きな支えなのかを知っている。そして誰もがかけがえのない大切な人がもがく姿を見た時、「この人の大丈夫に、自分になりたい」と願っている。(RADWINPS 野田洋次郎「解説」新海誠『小説天気の子』角川文庫 2019年、308-309頁)

### (2) ソーシャルワークとその実践(個別支援活動)とは、当事者、利用者、地域の人々とともに、たくさんの「大切」を見つけて、そして新しい「大切」を増やしていくこと～

どんな未来が こちらを覗いているかな

君の強さと僕の弱さをわけ合えば どんな凄いことが起きるかな

ほら もうこんなに幸せ

いつかはひとり いつかはふたり いや もっと もっと 大切を増やしていこう

ハルノヒ (2019年4月) 歌、作詞、作曲 あいみょん

(「ハルノヒ」は、アニメ映画『クレヨンしんちゃん 新婚旅行ハリケーン～失われたひろし～』の主題歌。主人公野原しんのすけの両親であるひろしとみさえをテーマに、歌詞はひろしの視点から書かれている。)

\*支援とは「支援する側」から「支援される側」への一方的な営みではない

\*支援者とは強い人のことでは決してないし、強くなくていい?強くない方がいいときもある?

\*そして、当事者がいつも弱いとは限らない?そして弱くてもいい?

\*その弱さを、弱さとして、「語れる・受け止めてもらえる関係や場所」があることの方が大切

\*もっと言えば、一人一人が強いかや弱いかよりも、つながりやかかわりのなかで、それらを「どう分け合えるか」の方が大切だということ

\*強くても弱くても、そのこと以上に、私たちが「どうつながるか、つながれるか」「寄り添い、かかわり続けられるか」ということを大切にしたい

\*そして、「分け合う」ことができれば、「凄いこと!」が起きる、たくさんの「大切」を見つけて、新しい「大切」を増やしていける

\*社会福祉やソーシャルワーク、自立支援、個別支援の活動とは、そんなことを大切にする思考や実践でありたい